

會報



第四年第一号

昭和八年二月五日発行

通巻第二十五号

富士行

四十年来とか、五十年来とか云ふあの大暴風雨の後で、国立から馬鹿に美しく富士が見えたので急に訪が纏まって一行四名増山高見打橋堀岡で出掛けた。

十一月十七日 若田（一・三〇）—馬返（三・一五）

—五合目（五・五〇）

思つて居たより雪が多く自動車は中し茶屋より少し行った所で下らされた。三合目より処々もどるので、スキーを持参しなかった他の三名は苦勞する。

十八日 晴、五合以下雲眺望なし。

小倉（六・〇〇）—本七合（九・〇〇）—八合（一一・三〇）—頂上（一二・三〇—一・〇〇）—小倉（三・三〇）

六合まで—俗称天地ノ境—は昨日の様にぬる。六合から七合までは風の強いか雪はなかつた。七合半辺からアイゼンを穿いたが、案外堅くなく、もぐる所があつた。風は殆んど無く、暖か、つた。期待してゐた氷も無かつた。（氷の一番多いのは五日だそうです）登りは頂上まで夏道通り行き、下りは九合まで夏道を下り、九合の直ぐ下から夏の所謂砂走に入つた。傾斜は十度だが、処々柔くもぐるのでグリースードは面白くなかつた。

十九日 小倉—若田—東京、

（堀岡）

「來ぬ人」に就いて

外ノ川小屋匿名座談會

出席者 A氏、B氏、C氏、D氏、E氏、F氏、G氏、H氏

- A. コンちゃんが出来なかつたね。どうしたんだい、忙しいから止したって云つてたよ。
B. 何故？
C. 何しろ元日は身重しくも一家のあるじ、元旦からうら／＼出歩くわけには行かない。
D. そうだらう。普賢うら／＼してるからね。

登山者のメツカ、ツエルマツト (一)

本編はグントの「ツエルマツトと其の山々」の第一章であつて、昨年八月第一稿を作つて置いたのがその儘になつて居たので、整理がてら本号から拙訳を連載させて戴く事にする。(熊)

× × × × ×

嘗てグアリゼールアルペン(モンテ、ローザ、マッターホルン、ミシヤベル、ヘルナー等)は此の中にあるの南斜面に次の様な云ひ傳へが行はれて居た事があつた。それによると彼のモンテ、ローザの真懷に不思議な谷が拓がつて居て誰も其処を探索した者もなく、人の音もなき地上の樂園があるといふのである。又其処では来る年毎に美しい花が咲き乱れ、銀色に輝く小川がその草原を流れ、冬になると附近の谷々に居る動物共が寒い其の季節を愉しく暮さうが為、其の樂園指して歸つて来るといふ。而も亦此の主脈の北側にも全じ様な云ひ傳へがあつた。ガイスポの谷の本當の源に、氷河の境を抜け出た所に深々と繁る草原があつて、其処の松や楓の老樹の下にはアルペンローゼやゲンチアーネが華麗を競ひ、又野羊鈴羊鷺モルモツト等が一年中仲良く平和に暮してゐる場所があると

いふのである。

此の樂園の如き谷間を求めんとして今から百五十五年前即ち西暦一七七八年の事、モンテローザの南麓にあるグレスニイから七人の冒険家が出発した。彼方のリーダーたりし者は右にモンテローザ研究家として有名になつたニコラス、グインセントの父であつた。同勢七人は斯くて種々なる困難の許に此の神秘の谷を探らんとしてまづ到達した地点は今日謂ふ所のリスヨツ木(四三六六米突)であつて彼等は其処にあつた大岩塊をいみじくも「兎見岩」と名付けたのであつた。然し乍ら其処に彼等の眼前に展開せる風物は何であつたか。其れは憧憬の樂土とは似も似つかぬ荒寂寥々たる氷雪の世界以外の何ものでも無かつたのである。彼等は傳説の余りに事實と相違せるに驚き呆れ且つ失望して歸つて了つた。

其れから以後、一七七九年及び一七八〇年に全じグレスニイの人が二三人当時としては非常に困難且つ危険多き遠征を敢行したが、又も矢張り何等積極的のものとは兎見し得ず失望すべき結果を齎したに過ぎなかつた。

當時彼等には此の氷雪の殿堂、ツエルマツトの山々が彼等の求めて居たものであるとは微塵も考

へ及ばぬ事であつた。時代は未だ孰さず此の高峻山岳の男性的美に対する理解を得るには至らなかつたのである。

新として人間が其等を認識する迄には約半世紀の時の経過を必要とした。ホーホゲビルゲは洵に崇高なる世界である。而してバイロンに従へば、それは人間の精神を衝動高揚する至高至上のものなのである。然し乍ら人間精神の高揚には先づ以て闘争及び内的克服により恐怖の念といふものが制約されなければならぬ。

此の闘争は徐々に行はれて居た。一七九九年にはオストアルペンのグロースグロックナー、一八〇四年には全じくオルトラー、一八一一年にはエングラ、一八一二年にはフインスターアルホルン、而して其右モンテローザの近峯の一ニが登頂せられて行つたが、此等の遠征は本来科学的目的を主眼とせるものであつて尚未だ自然愛好の精神或は遊技的感懐は殆ど是を認める事が出来ぬのである。而も此等の探險旅行には付きものなりと謂はれて居る驚怖や危険の叙述は全く身の毛もよだつが如くに書かれて居る。故に譬へば當時のモンブラン登攀者等が己が登山の記録をものし、是をある有名な旅行案内書が其の登攀者の大部分を目

して外見上彼等は精神的に正常でないと言つて居るのも決して怪しむには當らぬ事なのである。
(未完)

黒岳から大矢ヶ丸迄

去年十二月四日ペンちゃん、孫さんと三人(笑)は横濱の謙ちゃんや熊ちゃん要ちゃん等々の参加がある筈であつたが、黒岳に行つた時の事である。僕にとって春の武蔵沢溯行以来の山旅であるので楽しい愉快なものであつた。

初鹿野駅を午前三時五十分まだ真暗な中を夢遊病者の様な顔をして歩いた。頭が痛い様な重い様か何んとも云えない不快な気持である。

景德院の下を通つて十町も歩いたと思ふ頃電燈の煌々と輝いて居る立派な旅館が見える電燈がいつて居るので遂に足は其方向を向いて到々玄関先迄行つてしまつたが内は深々として皆んな寐て居るらしい。ペンちゃん、こんな処に居ても致方ないから先を急がうと云ふ、云はれて見ると成程やうである。譬え朝迄寐て見たとて僅かな時間であるしそれに武蔵を解いて上る氣も起らない。六時一寸前に大蔵沢入口の石の標石を右に見て、ものゝ五分も歩いたら途が西方に分れてしまつた。

道案内格の孫さんの記憶にもないと云ふ、そのくせとて立派な途である。初め左の方へ一町位歩いたら右の方の沢がとて広く見へたのもどつて今度は右の途をとつた。処が夜途にも余る位立派な途である。どうも立派な途は歩き易いせいかなどうしても自分の行く途の様に思へて致方ないものである。

暫くして山の神の鳥居の下に來た。此処で十五分位休んでそれから歩きかけたら夜が幾々明けて來た。処が突然孫さんが「オイ大変な事にあつたぞ、是れは大藏殿だ、どうもあの鳥居が見た事があると思つた。是れは大変な事にあつた」と云ふ。然しまだ別れ途からもの、十分位しか登つて居ないので餘り大変な事でもない。さつさと又戻つて大時半焼山沢の入口に來た。

此処で朝飯である、例の孫さんの得意のシユツシユツがリユツクの中から顔を出す。顔が出るや忽ち熱湯は滾り、味噌汁が出来上る。其の偉力は毎々御披露の如し。兎に角おつゆの中に入れても其の近ぢやんと切つて而も茹てあるんだから物凄いの。我々ルンペンマニヤ黨は孫さんと山に行く様になつてからは食べ物丈は普通以上にあつた様な気がする。鱈のつひと鹽し豚汁等と疑つた物を山で食

べられる様になつた。有難い事である。初め訪ふ本道に戻つて焼山の部落を過ぎると途も細くなり幾々雪が深くなつて來る。此頃先を金でも張り當て様つてな姿の二人連れが嚆嚆を持って歩いて居る。此の連中も黒岳の方面へ出掛けられるらしい。

沢をだん／＼つめて湯の沢峠に上る。久振りで見る雪の南アルプス連峰やハツヶ岳。初ては金峰と思はれる山々が手にとる様に見へる。そして昔に返つた様な感激をおぼえる。つく／＼山はいいなしと思つた。久振りで故郷に歸つた様な気がした。天気は朝方の細雨がすっかり晴れ上つて申かない。黒岳は此の峠からまだ三百米の上りである。一寸休んで白屋ヶ丸の登りにかゝる。汗を流して一生懸命上る。肩の処へリユツクサツクを置いて白屋ヶ丸に登る。此辺雪は相當あつて少規模なグリセードを楽しめた。是れから黒岳迄一寸退蔵で此処で退却仕様と思つたがペンぢやんの顔には行き度い色が出て居たし又今行かなければ一生の内又行く機會もないかも知れないと思つて腹の空いたのを我慢して出掛けた。頂上が十一時五十分、立派な一等三角点がある。一通り眺めて今來た途を戻る。

白屋ヶ丸の肩で晝食、又シユツ／＼を出して雪を溶かし紅茶をわかしで飲む。

是れから大矢ヶ丸迄屢根途である。大蔵高丸二時二十分、破魔船場三時、天下石を過ぎて、氷背買ひで一休み、四時大矢ヶ丸の頂上に立つ。ほんとはよく晴れた一日であつた。四時と云ふに早や日は落ちかゝつて居る。

もう懐しい赤石にも悪次にも塩見にも雲がかゝつて見えない。何んて思出の深い懐しい山々であらう。雲が掛つて鬼になると久振りに會つた旧友に別れた様な気がする。是れからはペンちゃんも通つた事のある処である。龍子山がすぐ目の前に聳えて居る曲沢峠が四時、通りかゝった爺やに道を聞いて龍子山の東を巻いて流れる沢に下る。

もう暗くなつてつうタンレが必要になつた、足も大分痛んで来たがまだ笹子駅迄二里以上ある、それで七時二十五分の上り列車に乗るつもりで一生懸命夜途を急いで甲州街道に出たのが六時十五分、三十五分には笹子駅に着いた。

今日は朝の三時五十分から約十五時間の労働ではあつたが天気も良かったし、山は存分に眺められたし、思ひがけない雪にも會つたしシユツ／＼の偉力で却馳走にも興つたし何から何迄全く申分の

のない楽しい旅であつた。

川村豊郎先生と山の湯

時局的にも非常に恵まれない勤めをして居る私も久振りに落いて書棚を整理し始めた時偶然珍らしい手紙を見出した、そして忘れるともなく忘れて居たなつかしい故人の姿を思ひ浮かべた。

其れは故川村豊郎先生からの手紙です。消印を見ると大正十四年六月十日になつて居ります。表は宿屋の全景の寫つて居る絵葉書で甲州塩山天湯廣友館と印刷されてあります中の文句は次の如く簡單なものです。

旅びがしたくなつたので甲斐の人になりました。明日天気なれば君のお話しの初鹿野を訪れる積りです。此の辺の地は君に取つては思ひ出の種となる所です。海のお湯にのみなれたる僕には深山のお湯も亦一興です。

唯だ宿の湯が目下釜の修繕で休みとなり別の宿の湯を貰ひに行くのには些か興を失しました。又学校でお目にかゝりませう。

甲州塩山廣友館にて 川村豊郎

手塚晴確君

閉ぢこめられ、おさへられた冬から開放され春ともなり、初夏の頃になると誰れもが家を飛び出し旅がしたくなります、川村さんも山の話し、故郷甲州の山間の様子を私から聞かされて居たので急に思ひ出すともなく飛び出して行ったのでせう。其れは嬉しい心盡しです。私の故郷の山河を味つて、海のお湯にのみ馴れたる僕には深山のお湯も亦一興ですと云って戴いた事は非常に嬉しい事です。すが又一方心苦しい感じがします。前に話の都合で甲州を、然かも甲府金地を深山と敬賞したのかも知れませんが、哲学者川村さんに深山のお湯として一興がられて戴くのでしたら外にもっとく良い深山のお湯を知って居ます信州別所温泉の奥、美ヶ原の山裾麓湯温泉も静かな所です、甲州では南アルプス、白峰の懐ろ西山温泉も、遙かに深山なお湯です、アルプスとまで行かなくともせめて此の様な深山のお湯にでも親んで戴いたらよめや惜しい才能と輝ける前途を持つて短命に終る事も無かつたではないでせうか。

川村さんは世話好きな人でした、府立二中出身の後輩たる私にも色々とお話をあたへて下さいました、久保田君と共に信州野沢温泉のスキーの話しをしたら其夏は早速野沢温泉まで行かれ随分長

く滞在したそうです。勿論温泉旅館です。ね君、あの土地の人はもうはると云ふ事を知らないね、自炊生活を奨励するなど損ではないか。面倒は面倒でもまかなつてやつたらずっと利益が多いのだがなし、盛んに宿のお主婦さんに僕もすすめてやつたのだが分らないのだよと野沢の景色を譽めながら話して戴いた事を今でも覚えて居ります。

會員消息

曾田庄太郎 一月廿二日、霧ヶ峯スキー場へ、近藤 恒雄 一月廿二日の日曜日に岩原スキー場へ

久保田禮治 一月二日より日光湯本温泉新スキー場へ（積雪四尺、雪質粉雪、但しブリッシュ多き由なり）

中川 孫一 (1) 一月一日より赤倉スキー場へ、(2) 一月廿二日湯檜曾スキー場へ

松本 謙三、吉沢一郎、村尾金二、磯野計藏、宇佐美敏夫、手塚晴雄、暮から正月にかけて学生増山、堀岡の両君も加へて越後苗場山へスキー行。

森竹五郎

久しく消息を絶ち安否をきづかはれ

たが無事旧臘十六日アメリカ経由にて帰朝す

一月二十日同氏歓迎の針葉樹会の席上に於て

は新帰朝の蘊蓄を傾け、学生までを敬聴する

こと多大（期町区三年町一の二の二、銀座七

三九番）、一月中旬より三越本店へ再び勤務

河相 薫

最初よりの約束とかく

小川竹夫

日本橋区虎町三、山一證券株式会社

入社に元日早々決定す。

中森長太郎

十二月廿一日より正月にかけて別

府の志高湖へ、

赤城鈴太郎

昭和七年十月発行の名録は誤なり、

大阪市東成区東桃谷町二の三と訂正す。

編輯後記

◇暮より丹後山道に、小金沢黒岳に、正月は赤倉、

湯徳曾と大活曜の中川先輩が大阪出張等社用忙わ

しく、未だ此等に就て名文を物せられてないが次

号にはスキー場に於けるよりも腕を振るゝとの

事です、期待して戴きたい。

◇大晦日も十二時近く、銀座街を歩いて居る時、

記憶から呼び起さなければ思ひ出せない程、久し

く會はなかつた森竹氏に、ひよつくり會つた、十

六日に帰朝した事を知らない幹事は最初人違ひで

はないかと思つた。脱靈にしては馬鹿にスマート

で帽子も靴も素晴らしく、足取りも確かなので安

心したが、餘りの突然に驚いた、約滿二ヶ年の精

在にてすつかり洗練され、日本語も忘れず、話

益々達者になった。針葉樹会歓迎会でもベルリン

トリヤ街消息など大分喋つたが兎に角彼は公衆

の席だった故詳しくは直々聞くことです。次号に

はあちらの土産話を書くそつです。

◇カルタ會をやらうと苗場の外の川の小屋でペン

ちやんと相談したので一月廿一日、晩浅草は聖天

町の會員金田さんの家に集る事になった、集る者

針葉樹會員松木謙三、村尾金二、吉沢一郎、金

田一郎、宇佐美敏夫、高橋要二、手塚晴雄、

一橋山岳部太田又一、堀岡清の九名、

名前がカルタ會だったのが肝腎のカルタの名手、中

川、近藤両氏が上越へスキーへ行つてしまったの

でカルタ會に出た面々は安心して静粛に競技を楽

んだために幸ひ金田君の家の障子も畳も無事だった、

夜更けて松木氏がおそくなるからとて横浜へ帰つ

たがけであとは一同益々興のり、麻雀と、花に二

組に分れて遂に徹夜になつてしまつた。

（未完）